

【今日の説教から】

「客間には彼らのいる余地がなかった」何という残酷な言葉でしょうか。寒い夜、暗い夜、マリヤは身重なのに、ヨセフもそれはそれは必死になっていいなづけのために場所を探し回ったことでしょう。彼女だけ一人だけでもと、どれだけ懇願したことでしょう。しかしその必死の働きかけもむなしく状況は進んでいきました。あわよくば、この住民登録から帰って、ナザレに戻ってから出産できるかもしれない。彼らには予測と希望がありましたが、ことごとく望むところを外れていました。

「ところが、彼らがベツレヘムに滞在している間に、マリヤは月が満ちて、初子を産み、布にくるんで、飼葉おけの中に寝かせた。客間には彼らのいる余地がなかったから…」ヨハネ1章のこの御言葉が思い出されます。「彼は自分のところにきたのに、自分の民は彼を受けいれなかった」

しかし、ところがのところがです。これらはすべて神様のご計画と深いご配慮なのでした。それらのすべての痛みや考えもつかないことは、「しるし」だったのです。

「きょうダビデの町に、あなたがたのために救主がお生れになった。このかたこそ主なるキリストである。あなたがたは、幼な子が布にくるまって飼葉おけの中に寝かしてあるのを見るであろう。それが、あなたがたに与えられるしるしである」

神様は天に居場所を失ってしまった私たちを救うため、身代わりとなって私たちを神の子としてくださったのです。

皆様、クリスマスおめでとうございます。

今朝も雪の日となり、ホワイトクリスマスとなりました。

昨日の冬至を過ぎまして、これからは次第に日が長くなります。光がその勢力を伸ばしていきます。これは、「すべての人を照すまことの光」であるイエス様のお誕生にふさわしいことです。そうです。洗礼者ヨハネの父ザカリヤによるこの預言の言葉の通りです。

「幼な子よ、あなたは、いと高き者の預言者と呼ばれるであろう。主のみまえに先立って行き、その道を備え、罪のゆるしによる救を その民に知らせるのであるから。

これはわたしたちの神のあわれみ深いみこころによる。また、そのあわれみによって、日の光が上からわたしたちに臨み、暗黒と死の陰とに住む者を照し、わたしたちの足を平和の道へ導くであろう」。

今日私たちがこの喜ばしい主のお誕生の出来事をお読みし、感謝と共に、「メリークリスマス」これはすなわち「ハッピークリスマス」という意味であろうと思いますが喜ばしい喜びを祝うとき、ここに見るのは主のへりくだりと犠牲の愛です。

7節にありますように、「客間には彼らのいる余地がなかったから」です。

ヨハネ1章に、次のように書いてあることが想起されます。

1:9 すべての人を照すまことの光があつて、世にきた。

1:10 彼は世にいた。そして、世は彼によってできたのであるが、世は彼を知らずにいた。

1:11 彼は自分のところにきたのに、自分の民は彼を受けいれなかった。

それでは今日の箇所を読み進めてまいりましょう。

2:1 そのころ、全世界の人口調査をせよとの勅令が、皇帝アウグストから出た。

2:2 これは、クレニオがシリアの総督であった時に行われた最初の人口調査であった。

2:3 人々はみな登録をするために、それぞれ自分の町へ帰って行った。

2:4 ヨセフもダビデの家系であり、またその血統であったので、ガリラヤの町ナザレを出て、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。

皇帝アウグストとは、ローマ帝国の初代皇帝であり、紀元前40年から紀元14年まで、50年以上にわたって皇帝であり続けました。そしてクレニオがシリアの総督であったのは紀元6－7年とされています。

ヨセフはダビデの家系であったので、ダビデの町ベツレヘムに向かいました。

サムエル上 16:18 その時、ひとりの若者がこたえた、「わたしはベツレヘムびとエッサイの子を見ましたが、琴がじょうずで、勇気もあり、いくさびとで、弁舌にひいで、姿の美しい人です。また主が彼と共におられます」。

16:19 そこでサウルはエッサイのもとに使者をつかわして言った、「羊を飼っているあなたの子ダビデをわたしのもとによこしなさい」。

神様はダビデの末裔である者、ヨセフの妻マリヤを通してダビデの王座を継ぎ、とこしえに神の民を治める主である王をお立てになりました。

ルカ 1:31 見よ、あなたはみごもって男の子を産むでしょう。その子をイエスと名づけなさい。

1:32 彼は大いなる者となり、いと高き者の子と、となえられるでしょう。そして、主なる神は彼に父ダビデの王座をお与えになり、

1:33 彼はとこしえにヤコブの家を支配し、その支配は限りなく続くでしょう」。

しかしそのような偉大なる王をお迎えするにあたり、世はどのようにそのお方を歓迎したのでしょうか。

2:6 ところが、彼らがベツレヘムに滞在している間に、マリヤは月が満ちて、

2:7 初子を産み、布にくるんで、飼葉おけの中に寝かせた。客間には彼らのいる余地がなかったからである。

「ところが、彼らがベツレヘムに滞在している間に、マリヤは月が満ちて」とありますから、ひょっとしますと、ベツレヘムに滞在している間にはまだ子が生まれないだろう、ガリラヤのナザレに戻ってからでも出産は間に合うだろうと考えられていたのかもしれませんが。ナザレからベツレヘムまでは約 110 キロメートル。これは身重のマリヤにとっても、またヨセフにとっても大変な旅であったに違いありません。

何という間の悪いと言いますが、このような旅路の中で出産の日程が早まってしまったのでしょうか。

人の思いや願望や計画もむなしく、「ところが」ということが、私たちの間でも往々にして起こるものです。

「ところが、彼らがベツレヘムに滞在している間に、マリヤは月が満ちて…」

それに先立って、ヨセフはどれだけ足を棒にしていくなずけのマリヤのために宿を探し回ったことでしょうか。どれだけ真剣に、駆けずり回って身重のいくなずけのために宿を探したことでしょうか。死力を尽くして、自分の場所はいらないから、せめて彼女だけのために、ただ一人分の宿だけでもと頼み回ったことでしょうか。相場以上のお支払いをしてもかまわない、お金には代えられない、どうかマリヤのためにと、どれだけ頼んだことでしょうか。しかし、人には情けというものが無いのでしょうか。住民登録のために人が押し寄せていたという理由もあるのですが、とうとうついにどこにも、客間には彼らのいる余地がありませんでした。何という悲しみ、何という挫折、何という失望と残念なののでしょうか。そしてとうとう彼らの居場所は馬小屋の中、そして赤ちゃんイエス様のベッドは飼い葉桶となりました。何というお劳しい……。どうしてそこまで日とは薄情で、強情で、恩知らずで、神を神としないのでしょうか。どうして人は、徹底して神様に自分の心の中の神座を譲らず、客間をも用意せず、外に捨て置いて、神様が私たちの心のドアをたたき続けても何の反応もしないのでしょうか。

「客間には彼らのいる余地がなかったからである」

讃美歌 124 「みくにをのみくらをも」

みくにをのみ座(みくら)をも

あとにすてまして

くだりにしイエス君を

うくる家あらず

住みたまえ、きみよ

ここに、この胸に

みつかいは声たかく
み名をほむれども
かみの子は賤(しず)の屋に
うまれたまいけり
住みたまえ、きみよ
ここに、この胸に

きつねにも穴はあり
鳥に巢はあれど
ひとの子は地のうえに
ねむりたまいけり
住みたまえ、きみよ
ここに、この胸に

つながれしつみびとを
はなちます君を
カルバリにくるしめし
人のつれなさよ
住みたまえ、きみよ
ここに、この胸に

しかし、「客間には彼らのいる余地がなかったからである」というこの言葉は実は私たちに向けられたものだったのではないのでしょうか。

罪を犯し、神の園を追われ、深い断絶にあり、罪は死をもたらし、永遠のふちがあったのではないのでしょうか。放蕩息子のたとえにありますように、私たちはもはや神の子とは呼ばれず、神のもとには私たちのいる余地がなくなったのです。その罪を、死を、呪いを、恐怖を、喪失を、寂しさを、嘆きを取り除くために主は生まれてくださいました。私たちのために身代わりとなるために、一切を経験して一切を明け渡して、私たちの住む余地を作ってくださいましたのです。

ヨハネ 14:1 「あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい。

14:2 わたしの父の家には、すまいがたくさんある。もしなかったならば、わたしはそう言っておいたであろう。あなたがたのために、場所を用意しに行くのだから。

14:3 そして、行って、場所の用意ができたならば、またきて、あなたがたをわたしのところに迎えよう。わたしのおる所にあなたがたもおらせるためである。

14:4 わたしがどこへ行くのか、その道はあなたがたにわかっている」。

14:5 トマスはイエスに言った、「主よ、どこへおいでになるのか、わたしたちにはわかりません。どうしてその道がわかるでしょう」。

14:6 イエスは彼に言われた、「わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない。

14:7 もしあなたがたがわたしを知っていたならば、わたしの父をも知ったであろう。しかし、今は父を知っており、またすでに父を見たのである」。

2:8 さて、この地方で羊飼たちが夜、野宿しながら羊の群れの番をしていた。

2:9 すると主の御使が現れ、主の栄光が彼らをめぐり照したので、彼らは非常に恐れた。

2:10 御使は言った、「恐れるな。見よ、すべての民に与えられる大きな喜びを、あなたがたに伝える。

2:11 きょうダビデの町に、あなたがたのために救主がお生れになった。このかたこそ主なるキリストである。

2:12 あなたがたは、幼な子が布にくるまって飼葉おけの中に寝かしてあるのを見るであろう。それが、あなたがたに与えられるしるしである」。

2:13 するとたちまち、おびただしい天の軍勢が現れ、御使と一緒に神をさんびして言った、

2:14 「いと高きところでは、神に栄光があるように、地の上では、み心にかなう人々に平和があるように」。

羊飼いたちは、大切な食糧源を育む大切な職務でしたが、その不規則な勤務から、安息日も守りがたく、荒野での勤務のゆえに、食事の前に手を洗うという衛生規定も守りがたく、きつい、汚い…というような見下された仕事、社会の底辺にいる人たちとしばしば見られていました。しかしそんな彼らが最初にイエス様にまみえる光栄な礼拝者としての招きを頂いたのです。

ルカ 5:30 ところが、パリサイ人やその律法学者たちが、イエスの弟子たちに対してつぶやいて言った、「どうしてあなたがたは、取税人や罪人などと飲食を共にするのか」。

5:31 イエスは答えて言われた、「健康な人には医者はいらない。いるのは病人である。

5:32 わたしがきたのは、義人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためである」。 5:33 また彼らはイエスに言った、「ヨハネの弟子たちは、しばしば断食をし、また祈をしており、パリサイ人の弟子たちもそうしているのに、あなたの弟子たちは食べたり飲んだりしています」。

5:34 するとイエスは言われた、「あなたがたは、花婿と一緒にいるのに、婚礼の客に断食をさせることができるであろうか。

5:35 しかし、花婿が奪い去られる日が来る。その日には断食をするであろう」。

2:12 あなたがたは、幼な子が布にくるまって飼葉おけの中に寝かしてあるのを見るであろう。それが、あなたがたに与えられるしるしである」。

どうしてこのような事態に、それだけは避けたかったというベツレヘムでの出産、それこそが、イエス様がダビデの王座を受けるべき王であることを証しするしるしとなりました。そして、どうしてこのような馬小屋の飼い葉おけの上で…と、その中で最上のベッドは飼い葉おけの上にしか見いだされなかったその環境は、そのような私たちの冷たく自己中心に臭く匂う、私たちの本音の心の中に横たわり臨在してくださる神様のご謙遜のしるしであったのです。

普通の宿屋の上に眠る赤子を見出すことは不可能であったでしょうに、馬小屋の上の赤ちゃんを探すなどという事は、起こり得ないことです。羊飼いたちにとってもそれは探しやすいしるしでありました。

同様に、正しい方が、罪もないのに十字架にかかれるというこの不条理も、神様の確かなしるしとして私たちに現わされているのではないのでしょうか。それは天に居場所を失い、いる余地の無くなった私たちのための救い、私たちを神の子とするための救いです。そのためにしるしとして、主は飼い葉おけの上で生まれ、十字架に死なれました。この救いのしるしを見て、この神の謙遜と愛とのしるしを見て、羊飼いたちのように喜びはせ参じて主イエス様を礼拝し、喜んで他の人たちにそれを伝える者は幸いです。

◇祈禱；天の父なる神様、今日の礼拝を感謝します。宿屋には主イエス様をお迎えする余地がなく、イエス様はご自分の国に来られたのに、ご自分の民は主を受け入れませんでした。しかしそれがやがて呪いの十字架に、人の身代わりとして就かれるイエス様にとってのふさわしいしるしでした。そのようにして私たちに天の居場所を得させてくださいました。どうぞあらゆる苦しめる方々を神様の救いと平安の中にお導き下さい。私たちの家族と、地域の方々を祝福して下さい。私たちをお用い下さい。主イエス様の御名によって祈ります。アーメン